ハロウィンとは

作業療法学科では、毎年、臨床実習中の学年以外の学生が仮装して集まり、学科内交流会としてハロウィンパーティーを行ないます。今年度は、自分たちで考案したゲームを中心に体育館で実施しました。年中行事を学科イベントと捉えるもう一つの理由は、この行事を作業療法の素材として医療現場でリハビリテーションを展開する有用性を考えてもらうためでもあります。

一方、他の２学科の教員室や事務室を訪れる学生さんに対しても、１０月最後の２～３日間は教職員がハロウィン用のお菓子を用意します。これらを目当てにいつもより多くの学生が訪れるため、それなりの準備をしておくのですが、あっと言う間に無くなります。「Trick or Treat！（ご馳走しないといたずらするよ！）」というお決まりの言葉でお菓子をゲットする学生さんに、私たち教職員にも思わず微笑んでしまいます。このような場合の返答としては、一般的には、「Happy halloween!（ハロウィンを楽しんでね！）、Here you are!（はいどうぞ！）」と言います。 怖そうな仮装をして来た場合、さらに「You are so scary!（とてもこわいわ！）」などと相手の仮装を褒めます。

現代のハロウィンは、古代ケルト民族のお祭りが由来だそうです。古代ケルトでは１１月１日が新年の始まりであり、祖先の霊が戻ってくると信じられていたようです。つまり、ハロウィンは、秋の収穫祭と新年の時期に、そして、日本で考える先祖の霊が戻るお盆の行事が一緒になっているお祭りのようなものなのでしょう。ただし、悪霊もこないように、ジャック・オー・ランタンを家の前に飾るとか、怖い仮装をすることで悪霊の仲間と見せかけて、自分たちを悪霊から守るようにしたとも言われています。その後、ヨーロッパに広く分布していたケルト人が自然崇拝からキリスト教に変わって行く過程で、次第

に、今の北米スタイルの行事になっていったそうです。インターネットの検索とケルト人の末裔であるアイルランド人から直接聞いた話をまとめてみました。

ところが、一つ疑問に思うことがあります。北海道の七夕で行われる「ろうそく出せ‥‥出せ‥‥かっちゃくぞ！」という風習は、１０月末のハロウィンにとても似ていますね。日本ではお盆に先祖の霊が戻るという考えから、「七夕にかっちゃくぞ！」となって来たのでしょうか。「東北地方の夏祭りが起源だ」と言う説もあるそうですが、想像をたくましくすれば、日本にキリスト教を伝えた人々の子孫やケルト人の子孫が東北や北海道に移住してきて、ハロウィンと東北の夏祭りを融合させた新たな習慣（日本版ハロウィン）と発展していったのかもしれませんね。

今年のハロウィンパーティーといえば、韓国・ソウル市の繁華街、梨泰院（イテウォン）地区で集まった多くの若者らが２９日夜に転倒により圧死したという惨事は記憶に新しいところですが、ハロウィンのとても悲しい出来事になってしまいました。毎年、渋谷に集まる仮装姿の人々の間でも、何かと問題が起こります。また、ルイジアナ州バトンルージュに留学していた日本人（名古屋の方）がハロウィンで撃ち殺された事件が３０年前に起こりました。変装してハロウィンパーティーに出かけるところで、訪れるべき家を間違えてしまったようでした。間違えられた家の住人から「止まれ、動くな」と言う意味で「freeze！」と言われたのですが、意味がわからなかったのか、その直後も間違った家に近づき過ぎたために不審者とみなされ、発砲されたと言うことでした。楽しいはずのイベントで不幸が起こるのはとても忍びないものです。

また、お菓子を子供達に渡すとき、毒入りスナックを渡したと言う事件が何度も発生することがありました。そこで、子供達がハロウィン当日に他所の家にお菓子をもらいに行くときは、１）あらかじめ訪れる知り合いの家に連絡をしておく、２）親（大人）が子供達のグループにつきそう、３）昼間の明るい時に家々を回る、と言うことで子供達を守るようにしているとのことです。中高生以上の年齢になると、それぞれのパーテイーで盛り上がることが多いようです。